

武蔵野日曜集会

信従と権威

——マルコ伝1章12～28節——

1977年9月18日

小池辰雄

即刻福音 獣とともに居給う 神国体・天国体 全生涯が帰依また帰依 帰入祈入 信従 奴隷意志 100%に従う 即人 網を棄てて 信従即権威 これ何事ぞ 聖霊にありて福音せよ

【マルコ1・12～28】

12 斯て御霊^{かく}ただちにイエスを荒野^{あら}に逐^おいやる。13 荒野にて四十日の間サタンに試みられ、獣とともに居給う、御使^{みつかい}たち之に事^{つか}えぬ。

14 ヨハネの囚^{とら}われし後、イエス、ガリラヤに到り、神の福音を宣^{のべ}伝えて言い給う、15 『時は満てり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ』

16 イエス、ガリラヤの海にそいて歩みゆき、シモンと其の兄弟アンデレとが、海に網^う投^なちおるを見給う。かれらは漁^{すな}人なり。17 イエス言い給う『われに従いきたれ、汝等をして人を漁^{すな}る者とならしめん』18 彼ら直ちに網をすてて従えり。19 少し進みゆきて、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとを見給う、彼らも舟にありて網^{つぐろ}を繕^{つくろ}いいたり。20 直ちに呼び給えば、父ゼベダイを雇^{やとい}人とともに舟に遺^{のこ}して従いゆけり。

21 斯て彼らカペナウムに到る、イエス直ちに安息日に会堂にいりて教え給う。22 人々その教に驚^{おし}きあえり。それは学者の如くならず、権威ある者のごとく教え給うゆえなり。23 時にその会堂に穢^{けが}れし霊に憑^つかれたる人あり、叫びて言う、24 『ナザレのイエスよ、我らは汝と何の関^か係あらんや、汝は我ら^いを亡さんとて来給う。われは汝の誰なるを知る、神の聖^{しょう}者なり』25 イエス禁^{いま}めて言い給う『黙^もせ、その人を出^いでよ』26 穢^けれし霊、その人を瘥^{ひき}癒^つせ、大声をあげて出づ。27 人々みな驚^あき相問^{あい}いて言う『これ何事ぞ、権威ある新しき教なるかな、穢^けれし霊すら命ずれば従う』28 ここにイエスの尊^うあまねくガリラヤの四方^{ひろ}に弘^{ひろ}りたり。

●即刻福音

マルコ伝1章12節からです。一番、福音書の基本のところですよ。

12 斯て御霊^{かく}ただちにイエスを荒野^{あら}に逐^おいやる。



ここは非常にマルコ伝は簡単に書いてある。いわゆる荒野の試みです。私が『無者キリスト』の第一部「キリストの実存十転」の中に、「受肉」、「受洗」そして第三転として「霊戦」（ユダヤの曠野―キリスト対サタンの一騎打―）のところに詳しく書きましたから、今日はそこは省略いたします。これはぜひ読んでください。その次は「伝道」で、「神の国は近づけり」ということも多少書いてあります。

マルコ伝で非常に特色のある言葉がそこに出ている。

「斯て御霊ただちにイエスを荒野に逐いやる」

という言葉です。「ユートス」（直ちに）という字なんです、ルターは何と訳しているかな。「バルト」か。「バルト」でもいいですが、ちょっと弱いですね。日本語の「ただちに」は大変結構な訳です。「即刻」という字がありますね。即刻というのは非常にいい。直ちに。マルコ伝は即刻福音なんです。マルコ伝は、言葉よりも、キリストの行為面、行動、これがほとんど記事の大部分をしめている。マタイ伝は非常に言葉が多いですが、マルコ伝はキリストの行為です。

だから、これまた、「御霊がただちにイエスを荒野に逐いやる」という。「逐いやる」という言葉も訳として結構ですが、「投げやる」のような意味です。御霊がイエスを荒野の中に駆り立ててしまった。イエスは止むにやまれずして出かけて行った。ということは、その前にヨルダンの洗礼で――キリストはいわゆる洗礼ではない。御霊のバプテスマ、聖霊のバプテスマです――彼は御霊のひと、聖霊の人となった。

聖霊に戦いを挑んでくるやつはサタンなんです。ヘブライ語で「サターン」、ギリシヤ語では「サタナース」という。もちろんヘブライ語からきたギリシヤ語です。紛争を巻き起こすようなものをサタンという。人を分離させるような、そういった悪い霊です。神さまから離そうとする悪い霊がかかってくるわけです。

● 獣とともに居給う

¹³ 荒野にて四十日の間サタンに試みられ、獣とともに居給う、御使たち^{みつかい}之に

事^{つか}えぬ。

妙なことが書いてある。

「私たちが試みにあわせないでください」

という、あの「試み」と同じ字が書いてある。「ペラスモス」という字です。ところが、イエスは試みられた。試みには二通りありまして、神さまからの試みとサタンからの誘惑と両方ある。これはサタンに試みられた。サタンに誘惑された。「ペーラゾメノス」と書いてある。これは「誘惑されつつ四十日の間」という言い方です。

断食ですね。まあ、雨水くらいは飲まれたかも知れませんが、とにかく大変な断食です。これくらいの断食をしたのはインドのカンジーです。日数からいうと、ガンジーの方は七十



日でしたかね。一か月以上の断食なんていうのは、普通の人だったらぶっ倒れてしまう。それで、こういうことを試みられたかは、他のマタイ伝、ルカ伝で読んでください。今日はそれは省略します。マルコ伝はただそれだけです。

「獣とともに居給う」

という。荒野の獣がやってきた。どんな獣か知りませんが、狼が来たかも知れない。アッシジのフランチエスコが狼に向かって、

「兄弟狼よ」

と言った。キリストはどんなものが来たって、これはフランチエスコ以上ですから、キリストに食いつきはしない。「兄弟狼よ」と言ったら、狼がなついてしまった。自然現象でも何でも、フランチエスコには全部、親しいものです。太陽に向かって、

「兄弟太陽よ」

と。これは本当に神の霊が、神霊が化体^{かたい}しているような人にならなければ、ただ口でそう言っただけです、魂の声でなくては。喉の声ではダメです。声ばかりではない。その全体の様子がもう狼が食いつかないんです。本当に溶けてしまった。

日本では第一流の坊さんがそうでしたね。その人を見ると、何かこつちが溶かされてしまふ。良寛さんなんかもそういう人です。何と言っても、愛は最大の力なんです。どんなに力んだって、この愛にはかなわない。ということは、生きとし生けるものはいかに愛に飢えているかということです。本当の愛に、天的な神の愛に、神的な愛にぶつかるといって、それで魂がまいるわけです。魂がまいるということは、本当にそれによって救われていくこと。

だから、「獣と共にいたもう」というのは、そういうわけです。キリストに、野犬であろうと何であろうと、みんななついてしまふ。動物というのは直観的ですから、判断ではないですから、むしろ動物は非常に勘がするどい。本当に愛している愛の人だというと、すぐになつく。猫でも、犬でも。こつちが恐がつたり、この野郎なんて思っていたら、ウーッなんて唸りだす。

「一切の生きとし生けるものは、一番深い生命は、愛によるんだ」ということは、ゲーテも『エッカーマンとの対話』の中で言っている通りです。

●神国体・天国体

これもまた簡単に書いてある。

14 ヨハネの囚^{とら}われし後、

これは洗礼のヨハネです。洗礼のヨハネが囚われたことはマタイ伝に詳しく書いてある。マタイ伝のどこですか。普段、みんなは聖書を読んでいるでしょうね。とにかく、聖書はよく読んでください。マタイ伝14章1～12節までをお読みくださって、どういうことで



洗礼のヨハネが殺されたかということを知ってください。ヘロデ、ヘロデヤとのことです。殺されたんですけれども。殺される前に、もちろん捕らわれたわけで、獄に入れられた。

洗礼のヨハネがキリストの先駆をしたわけです。そこでいよいよ時が満ちたと。洗礼のヨハネの、福音の露払いが終わったわけだ。そこで、

イエス、ガリラヤに到り、神の福音を宣^{のべつた}伝えて言い給う、¹⁵『時は満ちてり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ』

有名な言葉です。しかし、この言葉は実は洗礼のヨハネが既に言っているんです。

「汝ら悔改めよ、天国は近づけり」

という言葉はマタイ伝3章のところにある。マルコ伝は「神の国」と書いてある。マタイ伝では「天国」です。

「時は満ちた」は、直訳すると、「時は満たされた」という言い方です。受身の完了の形です。「カイロス」(時)という言葉は覚えてください。「時」といつてもこれは、

「然る^{しか}べき時、正しき時」

なんです。

「然るべき時が満たされた」

と。天的な、天の時だね。啓示的な意味を含んでいるわけです。今までじっと待っていたが、いよいよ新しい段階、新しい次元がここに起きる、迎えられる。それがいよいよ満ちたのであると。

そして、「神の国」(ヘー バシレイヤー トゥー テウー)の「バシレイヤー」というのは、「国」といいましても、神の支配し給うところ です。神の支配し給う事態が近づいて来た、やって来た。それが「神の国」です。国というのは政治的な国ではない。英語の「キングダム」なんていう言葉が使って訳してありますが。しかし、それはドイツ語の「ヘルシャフト」「支配しているところ」、神の意志の行ぜられる所、神の意志の実現する所、聖意実現の場所です。そういう時でもあるし、そういう所でもある。神の意志が実現する時、またその場所、それが近づいた。

というのは実は、神の意志の実現体がやって来たということです。神国とか天国とか。神国体、天国体というのはキリスト自身なんだ。神の意志を身に体している。神の意志を身に体して、キリスト自身が天国でありまして、キリスト自身が神の国なんです。だから、

「近づいた」

というのは、キリストがいよいよそこに現れたということとは、

「ここに神の国の支配の事態が実現してくるぞ」

と。キリストの言葉も、キリストの行為も、全部これは天国、神国的なんです。神の意志がそこに実現している。

「聖意体现の事態が今や近づいた」



というのと同じことです、キリスト自身に関わる限りですね。

●全生涯が帰依また帰依

そういうわけだから、

「カイ・ピステユエテ エントー ユーアンゲリオー」

「だから、お前たちは福音の中に信ぜよ」

という言い方をしている。これは三格でいつているんですよ、おもしろいですね。「中へと」ではない。「中に於いて信ずる」という言い方です。直訳すると、

「福音の中に於いて信ぜよ、信頼せよ」

と。これは決定的な言葉です。

ところで、「悔改める」という言葉を今、言わなくてはいかん。

「メタノエイテ」「汝ら悔改めよ」

という字です。これはいつかもしましたように、ただ「悔改めよ」という訳し方はうまくない。これは転向です。

「心の向きを変えろ、転向せよ、心を回らせ、回心せよ」

ということ。ヘブライ語では「クーム」と書いてある。「クーム」という字は、「帰る、そちらに帰り向く」という字です。だから、「帰依せよ」と訳せばいい。

「転向せよ、回心せよ、帰依せよ、帰り向け」

と。もう少し強くいえば、

「帰入せよ、帰り入って行け」

と。これが結局、「南無」になる。南無は帰依ですから。

「汝ら、南無せよ」

ということです。

「神の支配は近づいたから、汝ら南無して、福音に信ぜよ」

と、こういうことです。

「ユーアンゲリオ」という字はもちろん、

「喜びのおとずれ、よきおとずれ」

です。

マルチン・ルターは宗教改革をするときに、彼は宗教改革をしようと思ったわけではない。ただ、ローマ教皇の在り方と、その言っていること、また、カトリックの組織やそういうものを、神学的に聖書に基づいて論議したわけです。それをどこまでも学者的にやっていたわけです。ところが、それが自然に宗教改革になる。95箇条を城教会の門扉に掲げた。1517年10月31日、ヴィッテンベルグの城教会の門扉に一葉の大紙片が張り出されました。ラテン語で書いてある。「免罪符」というものを論じたわけです。



「免罪符というものはけしからん」

というわけで。あの免罪符というのは、

「ローマ法王の法規に背いた者に対するところの罪を免すためにお金を払え」

というのが始めの気持ちだったんだ。それがとうとう、人間の罪そのものを免すためにお金が必要という、御利益のお金になったから、とんでもないというわけで、ルターがこれに反駁したわけです。

「ローマ法王の免罪符は法王自身の課したる罰を免し得るに過ぎないものであるのに、越えべからざる限界を越えて、一般に人間の罪の許しを僭称するものであるが故に、ここに明らかに聖書の真理を犯すものである」

というわけで、始まったわけです。

その九十五箇条の第一条は、

「我らの主にして師なるイエス・キリストが『汝ら悔改めをなせ』

これはマタイ伝やマルコ伝のこの言葉です。

と言いつつとき、彼は信徒の全生涯が悔改めであるべきことを意味し給つ」

という言葉です。

「全生涯が帰依また帰依である。南無また南無である」

と、こういうことなんです。そうするとはつきり分かるでしょ。だから、「悔改め」という

訳がうまくない。ただ

「悪かった」

と言つて、悔いて改めるといふような、いわゆる道徳的な意味ではなくて、もっと積極的な意味で

「常に新たに神に向かえ」

ということですよ。

「人に向いていてもダメだ、自分に向いていてもダメだ。自分を見ても、人を見てもダメだ。神さまに向ける。常に新たに、絶対界に自分の魂を向ける。全生涯がそうであるべきことを意味している」

と、さすがにルターさんはしつかりつかまえてしまった。

● 帰入祈入

そして、これは何も或る時だけではない。帰依は、限りなく帰依していく。仏教でいえば、

「南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経は、限りなく唱えられていけ」

というわけだ。素晴らしい言葉です、この「南無」というのは。

我々は、常に新たに帰依していく。それはどうしてできるか。帰依帰入は、祈り入る、祈りがなければダメです。祈りとは、自分を投げ込むことです。何かお願いすることでは



ないですよ。お願いすることは、祈りの後の枝葉に過ぎない。本当の祈りというのは、自分を投げ入れること。

これがみんな分かっていないんだな、クリスチャンなんて言っただけで。体裁のいい祈りばかりしている。なるほど、聞いていけば、ごもつともな祈りをしている。違うんですよ、祈りの質が。本当に投げ入れている祈り、かどうか。もうそういう祈りだと、聞いていて、グーッとくるです。自分を投げ入れる、そういう祈りでなければ届かない。

キリストなんかは神の懷の中に入ってしまったている。投げ入れもへったくれもない。懷の中で祈っているようなひとだ。

いいですか。あなた方も、我々も、本当の境地はもう、懷の中で祈っている。神さまの、キリストの懷の中で。ただ大きな声で祈ることが祈りではない。沈黙で一向差し支えない。小川のせせらぎの如き声で一向差し支えない。問題は、それが本当に投げ入れているかどうか、中に入っているかどうか。祈ると直ちにその中に入ってしまうんです、本当の投げ入れは。これも「即」なんです。即刻、即座です。おもしろいね、この「即座」という言葉も。「座」は場所だよ。「刻」は時。漢字の味をよく知ってくださいよ。

みんな漢字をいい加減にしているから困る。今朝、テレビで

「漢字をだんだんどのように略するか、中国といろいろ協議しなくてはいいかん」

なんてやってた。略したっていいだろう。けれども、略し方が元の意味がわからないような、そんな略し方をされては困る。私は反対だ、そんなことは。

全生涯が帰入また帰入、南無また南無である。そして、その中に入ってしまう。だけれども、私はルターをもう一つ突き抜けて言いたいことがある。そいつは最後にしようかな。

●信徒

16 イエス、ガリラヤの海にそいて歩みゆき、シモンと其の兄弟アンデレとが、海に網投うちおるを見給う。

シモンとアンデレ。「シモン」というのは後で「ペテロ」といわれる人です。漁師であつた。

かれらは漁人なり。^{すなわち}17 イエス言い給う『われに従いきたれ、汝等をして人を漁る者とならしめん』

いきなりそんなことを言う。キリストは驚くべきひとですね、ペテロの先の先まで見ている。

「お前たちは漁師で、魚をとっているが、今に人をとるひとになる」

と。まだ先の先の話なんだけれども、キリストは将来を予見しているわけです。ペテロなんていうのはキリストに躓いて、しょうがないやつだったんだけれどもね。

そこで、「従いきたれ」と書いてある。直訳すると、

「私の後から来い、私について来い」



という意味です。そう言ったら、

18 彼ら直ちに網をすてて従えり。

はい。ここのがまた大事なところです。

「彼らは直ちに網をすてて従った」

せっかく、漁をしているのにね。

「なにも言わないで直ぐついて来い」

と言ったら、彼らは――やはり「ユートス」です――直ちに網を捨てながら、彼に従って行きました。この場合の「従う」という字はまた別の字が使っている。

「どうしてですか？ 今ですか？ 私たちはお魚をとっているに、なぜですか？」

なんて、いろんなことを聞かない。これが即ち「信従」なんです。キリストを100%に信じて従った。嫌々いやいや従ったのではない。信じて従った。

あの「服従」という言葉がある。あれは私はあまり好きではない。藤井先生がよく「絶対服従」ということを仰ったけれども。

「信仰は絶対服従だ」

と。服従というと、昔の陸軍はそうなんです。陸軍でも海軍でも、軍人は上官の命令には直ちにこれに服従する。信従とは言わない。律法おきてとしてただ従うのがこの服従です。

この場合のは律法おきてではない。キリストを信じて、そして従う。「信従」という言葉はありますよ。即、信従した。信が直ちに行為に現れた。その行為は、従うという行為です。

今の若い人はなかなかこれをやらない。まず自分が考えてから自由意志によって行う。先ず考えて自主的に判断してから。みんなそうだね。自主的に判断している。ところが、自主もへったくれもない。これは僕しもべ○になっている。僕の心です。キリストを100%に信じて従うんです。「自主」ではない。「奴隷」なんです。奴隷と言ったって、これは普通の奴隷ではないですよ、奴隷という言葉を使うけれども。

「信じて従って自分の意志を棄てている」

ことを、ただ「僕」とか「奴隷」とか言っているだけの話です。

● 奴隷意志

マルチン・ルターが

「自由意志ではない。奴隷意志だ」

と言ったのは、そのことなんです。エラスムスが「自由意志論」を言った。エラスムスの自由意志論は、道徳哲学の世界では、それはそれで真理です。けれども、宗教の世界になったら、その「自由意志」ではダメなんです。宗教の世界では、もはや人間は本当の自由を失っているから。みんな我執でしょうが。我執に囚われている。それを「罪」というんです。全ての人は罪びとであるというのは、全ての人は我執人であるということです。



己にとらわれているんだから、万人は罪びとなんです。

「全ての人々はこれ罪びとである」

という。ただ一人の例外者がいた。キリストだけ。詩篇の14篇にも、

「神を求める者が^{ない}。すべての者は悪をなしている。善をなすもの一人だに^{なし}」

という。あれがみんな我執なんです。我執に囚われているから、表向き善のように見えたって、本当の善ではない。

親鸞が言っている「無義の義」ということは——あの場合の義は、こちらが殊更に何か企てて意識してやるのを義という——そういうものが無くなってしまった。これから抜けてしまっているのが僕の姿です。だから、相手を信じることは、相手を然りとする^{しか}ことは、自分を否とする^{いな}ということです。

「神さまを然り^{しか}」

とするときは、

「自分に対しては否^{いな}」

と言っている。

「自分をゼロにしている。神を100%に、無限大にしている」

これが信従の姿なんです。

だから、ヤコブに言わせれば、シモンとアンデレは、

「その行為によつて義とされる」

と言うでしょ。パウロにいわせれば、

「その信仰によつて義とされる」

と言うでしょ。同じことなんです。これは信、行、一如になっているから。信、即、行の世界です。信が本当の信であれば、行ならざるを得ない。にもかかわらず、人間はダメだから、行が伴わないようなことがしばしばある。

「信仰によつて義とされる」

ということとは、どこまでも行為は考えませんよ。

「もう、私はダメなんだ。行為面ではもうゼロで、ダメな者なんだ。躓いてしょうがないんだ」

と。それでも、「信仰によつて義とされる」ということは真理なんです。

「行為が伴ったからその信仰は本ものである」

と、逆にそうは言えない。信仰が本ものならば、行為は伴うことが自然であるが、そうでない場合もある。だけれども、この信が本ものであるとは、どうして本ものなんですか。聖霊が来なければ本ものにならない。

「本当の信仰とは、かくかくの如きものである」



と、マルチン・ルターが『ロマ書序文』のところで書いたあの言葉は素晴らしい言葉です。時々、私は書いているはずですが。

●100%に従う

そういう信徒です。ところが、これが本当の男らしきでもあり、女らしきでもある。大体、信徒の最たるものはキリストであつたんです。キリストは

「私は何もできません。何も言えません」

と言つてゐるではないですか。

「私は父なる神に一切、その言いなりになつて、動いています。その言いなりになつてやっています」

と。キリストは信徒の極致なんです。それは自分を本当に棄ててかかっている。我執が全然ない。これが本当の男らしきであるとともに、これは本当の女らしきでもある。これは本当の人間らしきというんだ。本当の人間というのはどういふのかというと、神さまに対して100%に従っているひと。いいですか。それが信徒です。

だから、キリストという奴とは人が見えるからね、

「このペテロという奴はなかなか躡く奴だが、しかし、これは率直に向かつてくる

奴だ」

と。それで、直ちにペテロを捕まえて、見ている。キリストは人の本質がすぐ見えるひとですから。そうしたら、その通り、直ちに従つてしまった。

「豚に真珠を与えるな」

なんてキリストが言われたが、福音というものを、何でもかんでも人に伝えようとしたつて、それはダメだよ。或る時は、誰にでも言つたらいい。けれども、これに躡く者や反対する者や、いろんな人がある。けれども、

「これを本当に福音の中に入れてやりたいなあ」

と思う人は、わかるんです。ところが、案外――

「あの野郎は頑固でしょがないな」

なんていう非常に頑固なやつは――その頑固がひっくり返ると、また凄いことになる。パウロがそうなんです。キリストはパウロの頑かたくなさは分かっている。けれども、あれがひっくり返つたら凄いことになるということも見てる。だから、

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか!」

とやつつけたんです。

●即人

この「直ちに」ということ。



「まあ、明日にしましょう。一か月後にしましょう。来年にしましょう」
ではないですよ。

「今此処ここにおいて」

というのが、この直ちにということ。これが即座、即刻ということ。

何でも思いついたらすぐ行動に移す。事業家の特色もそういうところがある。「時刻」というね、期限をつかむことが敏びんなんです。カイロスがグツとつかむ。それをぐずぐずして、ああだこうだと思案している人は結局、自分で運命をふさいでいく。展開しない。人生は、ある意味において、性格劇ですからね、運命劇ではない。その人の性格がその人の運命を自分で結局、つくっていく。常に自己を乗り越えていかなければいかん。自己に執着しているうちはダメ。これは人生の気合だね。私なんか、どっちかというと思案型なんだよな。だから、過去においては、随分マイナスをくった。直ちにがなかなかできない。しかし、御霊がきたら、大分違ってきた。

キリスト自身が正にこの「直ちに」の人である。

「神に直ちに」

の人である。「即人」(即座即刻、神に直ちにの人)なんだ。即人なんていう言葉はないけれども、今新しく出来た。これも直ちに出来てしまった(笑)。即人とならなくてはいかん。困るね、新しい言葉をつくって。我は即人なりというわけです。

●網を棄てて

網を棄てて進んで行ってしまった。

「人を漁すなる者とは何だろう」

と、はじめは思ったでしょうね。まあ、しかし、これは課題だよな。

¹⁹少し進みゆきて、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとを見給う、彼ら

も舟にありて網を繕つくろいいたり。

私もガリラヤ湖畔に行つた時に、正に網を繕っていた漁師がいた。ビニールの網だったけれども、その切れ端を少しもらつてきた。

²⁰直ちに呼び給えば、父ゼベダイを雇人やとこひとともに舟に遺のこして従いゆけり。

お父さんに

「どうです、こうです」

なんて、わけも言わないで従つて行つた。

日曜日に、

「今日は誰々がやって来たから行けません。こういうお義理があるから行けません」

なんて、いろんなことで集会に來ない人がある。あなた方、日曜日は「安息日」なんて言つたつて、これは戦いの日なんです。女の方はどうもそれで負けてしまうんだよな。女の



方でも負けないうようになってもらいたい。

「日曜は、私はキリストに会う時なんです。集会で霊なるキリストにお目にかかりに行くのに、お前たちになんか会っていられるか」

なんていうわけで、それで集会に出てくるような魂にならなくては。

「この世の仕事が忙し過ぎるから」

とか、

「先生の所は遠方すぎるから」

とか、そういうことを言っているうちは、まだダメだよ。

今度の幕屋の記念日には、私は宣言するから。そういうのはもう、集会から出てもらう。私は自分のことを言いたくはないけれども、とにかく何十年間、日曜を私は戦って来たんです、正直。その戦いを共にしないような方々と私はやるわけにいかんですよ。

集会で、キリストに会えば、キリストの中に入れば、聖書を食らえば、もの凄い力が来るではないですか。六日間、突っ走れますよ。ただここでもってボヤボヤしているために来ているのではないんだから。しかし、そういう集会は、日本にいくつあるか知らんよ。おぎなりの習慣的な、ただ気分的な礼拝がたくさんあるでしょうね。祈禱書なんて出来上がってみたい。

無教会には、人間的な或る意気込みはありました。けれども、それはまだ人間的です。聖霊の世界ではない。いわゆる

「信仰の英雄」

というような、そういうヒアローシップはダメだよ。いわゆる「信仰の英雄」ではない。もうひとつ御霊の世界は上なんです。

そこで、ヨハネとヤコブとシモン（ペテロ）。キリストに最初に捕まえられたこの三人が、キリストの直弟子として、キリストの十字架に到るまで、躓いたり転んだりしたけれども、とにかく従って行った。そして、最後にはみんな躓いた。けれども、聖霊が来たらば、これが本当に三本柱になった。それから後からパウロが出てきて、四本柱になったけれども。彼らは即人的な弟子です。この三人は即人たる弟子であつた。世の中は、数ではないですよ。本ものになるかどうか、それだけです。他人の問題じゃない。あなた方一人ひとり、自分の問題です。自分が本ものになればいい。福音の世界で本ものになる。文化文明なんて言っているうちはダメだよ、もう一つ奥の世界に入らなくては。

●信徒即権威

21 斯て彼らカペナウムに到る

カペナウムというのは北の方です。ここはシナゴグの昔の跡があつて、非常に大事な所です。



イエス直ちに安息日に会堂にいらて教え給う。

ここにも「直ちに」とある。

22 人々その教に驚きあえり。それは学者の如くならず、権威ある者のごとく
教え給うゆえなり。

「権威ある者のごとく」という訳し方もできるとはうけれども、

「権威ある者らしく」

と言った方がいい。「のように」ではない。「らしい」んです。「らしい」という言葉はそういう意味に使うでしょ。学生は学生らしく、女は女らしく、男は男らしくと。

「権威ある者らしく、教え給う故なり」

ということ。 「権威」という字は「エクス・シア」という字で、

「十全なる力を持つている」

という意味です。もちろん、この権威は神的権威です。人間の権威ではない。神的権威は、聖霊がなければ来ない。

いいですか。なぜ、私は今日、題に「信従と権威」と書いたかというと、神さまという「オーソリティー」そのもの、「エクス・シア」そのものであるところの神さまに、100%に「はいっ」と言つて信じ従っている、そういう人に権威が来る。信従即権威なんです。直ちに権威がくる。信従・神・キリストに対するところの100%の平伏しの魂、「はいっ」と言つてそれに平伏す魂に、本当の権威がくるんです。

「私はひとつ考えよう。自主的に判断しよう」

なんて言うところには、ひとつも本当の権威はこない。男の人でも女の人でも、老いたるも若きも、本当にその世界に入れば、自ずから権威が備わってくる。何も恐いものがなくなるです、この権威が入ってきたら。

私なんかは昔は弱虫で、少し偉そうな人が来ると、なにかこつちがおびえるような気が持があつた。今は全然、そんなものはありはしない。人間的な相対的な敬意はもちろん払いますよ。なにも威張りくさることはない。そういうことと本当の権威があるということは全然、次元がちがつたはなしです。そうすると、

「なんか、あれは謙遜な人なんだが、なんかちよつとどうにもならん（権威のある人だな）」

なんていうことになるです、女の方でも。

「いぎ、右せんか、左せんか」

という、究極の真理のことになったら、もう

「ナイン（否）！」

とすることが出来る。

マルチン・ルターがその当時のローマ法王や、カルル五世に対して、「否！」と答えた。



自分の書いたものを取り消せと言われたら、

「私は聖書と聖書の真理によつて反駁されるのでなかったならば、私はこれを取り消すわけにいかない」

と。彼らに対して「ナイン（否）！」と言った。神に対しては「然り」と言った。ルターは神に対して「然り」と言ったのは、自分はそれに本当に信従しているから、権威を持つてしまったからです。

だから、学者の如く、学者的良心で、

「こうでもあろう」

だとか、

「私はそう思う」

だとか、そういう言い方はしない。権威の世界は、

「こうである」

と断定するんです。「あろう」なんて言っているのではない。必ずそうなっていく。現象はそうならなくても、根源の現実ではそうなっていく。

讃美歌で、「うならん」とか書いてあると、気がぬけてしまう。私はそう歌わないんだ、もうひとつ奥を歌う。

「イエス、聞きたまわん」

なんては、

「聞きたもう」

と歌わなくてはダメです。「たまわん」ではない。「たもうであろう」だけ余計なんだ。そういう魂にならなかつたら、力は来ないですよ。相対的な世界の判断で、

「こうでもあろう。ああでもあろう。こうなると思う」

なんて、権威のない世界はそういう世界です。

「それでは、お前は独断ではないか」

と。そうではない。いわゆる独断で言っているとは違うんです。そこが分からない人は、すぐ「独断だ」なんて言う。

皆さん、いいですか、身体の調子が悪かったり、あるいは他の事のいろんな問題があったり、そんなことに左右されてはいかんですよ。もう一つ奥の世界に入ってください。キリストの力、御霊の力がくる。

「我は門なり」

という。十字架を通つて聖霊の世界に入つてごらんなさい。それはもう……、私は異言が出そうになって困る。

だから、断定している。ヒルティーも聖霊の人です。ですから、彼は「うであろう」なんていう言い方はあまりしない。実に、ときはきとものを言っている。ケーベルさんが



「本当にヒルティーは確信をもって言っている」

と言った。確信というのは、主観的な確信ではない。ヒルティーはもう実によく聖書を読んでいますからね。聖書が化体しているから。私が今度、書いた『百世の師ヒルティー』（小池辰雄著作集第五巻）はよく読んでくださいよ。特に私は教育者たちに読んでもらいたいと思っている。文部大臣にも読んでもらいたい。

「学者」という字は「グラマテウス」という字で、「グラマー」という字からくる。「文法」は「文字」という字です。文字に拘泥する者たちを「グラマテウス」という。

「グラマテウス（学者）の如くならず、エクソーシア（権威）を持てる人らしく」ということ。

「儀文は殺し、霊は生かす」

とパウロが言った、その儀文的な文字にただ詮索ばかりしている連中が、このグラマテウスという人です。

そういうように自分で権威を持つなんて思わなくなつて、自ずからそういうことになつていく、本当に平伏している人は。だから、傲慢ではないですよ。権威あることと、何か驕り高ぶっていることとは違う。謙虚な人に本当のオーソリティーがくる。これはキリストがそうであつた。信従と権威をそのまま身をもって証した最大な人間はキリストである。

「我は何事もなしあたわず」

とキリストは言っているではないですか。

「私は何もできない。神さま!」

と言つて呼びかかつて、神の力をいただいて、信従していたらば、一切のことが出来た。今日の後半の方に出てくるところの、直ちにキリストの権威ある業が現れている。これはみんな権威ある業です。

●これ何事ぞ

23 時にその会堂に穢れし霊に憑かれたる人あり、叫びて言う、²⁴ 『ナザレのイエスよ、我らは汝と何の關係あらんや、汝は我らを亡さんとて来給う。われは汝の誰なるを知る、神の聖者なり』

穢れし霊に憑かれたる奴がそういうことを言つた。これは悪霊でも、霊の世界は霊が分かるからね。こつち（悪霊）は黒い。こつち（キリスト）は白く光っている。白光の霊だけれども、霊の世界だから、相手が神の人、神の聖者であることが見えるんです。普通の人は見えない。キリストは――

「ナザレのイエスは、なんだ、少しこの頃、変わったことを言つたりしてゐるななんて――ナザレ人には躓かれた。それで、ナザレにはキリストは御免こうむつて、

「預言者は故郷にいれられず」



と言って、カペナウムの方に来てしまった。ところが、カペナウムの会堂にいた悪鬼に、穢^{けが}れた霊に憑かれた奴が、

「これは大変な人だ」

と、それを暴露してしまった。キリストは、「今は私を現すな」と言ったのに。

25 イエス禁^{いまし}めて言い給^{もた}う『黙^{もだ}せ、その人を出^いでよ』

「今、私を神の子、神の聖者だなんて言われては伝道の妨げになるから」

と。「何の関係あらん」と。それはそうだよ。悪の世界と善の世界と、善玉と悪玉とは関係がない。

「私たちを亡^なぼそうとやって来たな」

と。それはそうですよ。キリストはサタンをやつつけるんだから。サタンに舐^なめられてしまったら大変だ。あなた方は、悪霊がいるから、そんなのに舐められてはいかんですよ。

罪^{よこしま}は、邪^{よこしま}な心を持った者——権謀術数したり、策略をもちいたり——こういう奴が一番地獄のどん底に行く。ただ情感的に間違ったりなんとかはまだ軽いんです。意志的な間違っただのが一番罪が重い。キリストを裏切ったり、謀^{むほん}反したり、神を裏切ったり。これはサタンです。これはみんな地獄行き。ダンテがそのように罪の分類をやっているけれども。

25 イエス禁^{いまし}めて言い給^{もた}う『黙^{もだ}せ、その人を出^いでよ』

霊出しというやつです。私も昔やりましたよ、これを。

26 穢^{ひきつ}れし霊、その人を瘰^{ひきつ}癧^{ひきつ}けさせ、大声をあげて出づ。

こういうようなことは、病理学的にいうと、そういうようなことを医者には言わないでしょう、医学の世界では。

「これは精神的に異常な人間だ」

と言う。ところが、医者にはそういう霊の事態が分かっていない。これは本当に霊が出されてしまった。そうしたらば、瘰^{ひきつ}癧^{ひきつ}けさせ、大声をあげて出ていってしまった。

27 人々みな驚^あき相^{あい}問^{もん}いて言う『これ何事ぞ、権威ある新しき教なるかな、穢^{ひきつ}れし霊すら命^{いのち}ずれば従^{したが}う』28 ここにイエスの噂^{うわさ}あまねくガリラヤの四方に弘^{ひろま}りたり。

これから後も、いくらでもキリストが御霊の権威をもつてなさったことが、マルコ伝には次から次へと書いてある。

皆さんも、本当に聖霊の世界に入ったら、その権威があるんですよ。相手の人を救ってあげようと思ったり、病を癒してあげようと思ったら、本当に御霊に感じたら、それをやらなくてはいいんです。

「私は、まだそれはダメです」

なんて、いつまで言っているか。

壮年の諸君なんかは大いにやつてもらいたいんだ、僕は。もう、今度の25日を限りに、



壮年の諸君はみんな伝道に独立してもらおうかな。まあ、それは、すぐ私は直ちにそういうことを言うから、躓いたら困るですよ。もう10何年も一緒にやっているんですから、もつたいたいですよ、壮年の諸君が活動してくれなければ。御霊の権威が、私たちは福音を受けたらば、本当にその角度がくれば、できるんです。

I君みたいな――ああいう身体障害者でしょ――その人が本当に御霊の権威をいただいたから、どうですか、あのような伝道をしている。私はI君には頭が下がるよ。

この福音はいい加減な福音じゃない。もう「キリスト」と言うならば、本当にキリストがさびついているような人になりたいです。

●聖霊にありて福音せよ

そこで私は最後に、さつきと残りしておいたと言ったのは、

「天国は近づいた。時は満ちた。汝ら、南無して福音を信ぜよ」

とは、

「汝ら、聖霊に在りて福音せよ」

と。そういう言葉に私は変えたい。変えたいということは更に展開したいわけです。

「神の国は近づいた」

ではない。

「神の国は汝らのうちに在り」

です。我々はこの福音を聴いたらば、

「我々の中に神の国は入っているではないか」

というわけです。

「お前たちは悔改めて」

ではない。

「お前たちは聖霊に在りて」

聖霊に在るからこそ、また本当に南無が言えるんですけれども、

「聖霊にありて福音せよ」

だ、今度は。「信ぜよ」ではない。「聖霊に在りて福音せよ」ということです。

生活において、どういう人にでつくわしても、何か機会があれば、その人を福音の世界に導くのが、それが伝道なんです。何も集会をしなくたっていい。Mさんは会社でもって社員に福音しているではないですか。どこにおきましても福音するということは、その人を通してのつぴきならない現れ方があるわけです。何も人まねの必要はない。

「聖霊に在りて福音せよ!」

ということですよ。

それを、普段は、そつちはもう全然やらないで、ただ聖書を読んでただ日曜日に来ている、



ということでは、いつまでたっても始まらない。そういうものではないということです、

「我は安息日の主たるなり」

とキリストが言われたのは。

何も私はあなた方を責めるのではない。いよいよそういう角度で行きましょう。そうすれば、日曜日にいらっしゃっても結構ですよ、もちろん。ただ、私の気合は分かってもらいたい。気合がないというのでもない。私はとにかく言うことが乱暴で申し訳ないですけども。善意をもって私は言っているつもりです。だから、

「神の国は既に我々の間に来ているから、中に来ているから、聖霊に在って福音し

ようではないか」

と。『ハレルヤ』誌なんて、いくらでも余っています。お金なんかありませんから、持つていつてください。そして、カバンの中でも入れておいてどこでも、

「ああ、この人にひとつ読ませてやろう」

と思つたら、やつてください。それがどんなに無駄なことであつてもいいんです。何がどういうようにして働くかわからん。それが本当の協力というんです。I君の雑誌も余っています。どうぞ、使ってください。

なにか、人間というものは、ひとつの魂の打ち込み、意気込みというものがなかったら、これは福音を受けている事態ではなくなってしまう。とにかく、私みたいな野郎を使つて、神さまは今まで何十年とやつてくださった。そして、不思議なことも、もう数えきれないほど起きている。これは無教会とは違うんです。私の無教会の昔の友だちが、

「小池はちよつと変わった」

と言うが、

「お前たちとは本当に違うんだぞ」

と、権威をもって言えるんです。それは、

「私はこの福音の世界に、使徒たちのこの次元が慕わしくてしょうがないから限りなく進もう」

と、やっているわけです。私はぶつ倒れるまでやるから。

ことに若い学生諸君がこの世界に入ったら、えらいことになってくるよ。それはもう、勉強でも何でももの凄い力が出てくるから。そういう福音を全くとりちがえて、私がD大で教えている「ドイツの宗教」の時間の百人くらいの学生でも、本当に聴いているやつは前列の何人だか知らん。私は正直もういい加減、学校が嫌になったね。

しかし、私の気持はお分かりくださったと思います。最後に言った、

「神の国は我らの中にあり、我ら聖霊に在って福音せん！」

という、その新しい神さまの御霊の啓示をしつかり受けとってください。おわります。

